

馬來の道路と自動車

清野謙六郎

道路事情

馬來に道路らしい道路が建設されたのは、一八七五年ベラ戰爭中英國の工兵隊に依つて設けられたマタン——タイピン間の道路であると謂はれてゐる。

其の後各州の主要地點を連絡する道路が建設されたが、密林を切開くため頗る工事は困難を極め、發達は遅々たるものであつたが、一九〇二年自動車の輸入を期に、馬來の道路建設計畫は根本的に樹立を見るに至つた。

即ち、各州に於ける標準道路は總て砂利道路とし、その施工基面二十二呎、道路幅十六呎、最大勾配四十分の一、屈曲點に於ては前方二乃至三鎖を見通し得べきものとし、又道路には總て各州の首府を起點とし、一哩、半哩、四分の一哩毎に哩程標を設ける事にした。之實に馬來に於ける今日の道路網の基礎をなしたものと

である。

一九三八年に於ける馬來の主要道路は左の如くである。

馬來の主要道路（一九三八年現在）

州別	錦裝路	砂礫路	土路	計
海峽植民地	一、〇〇七	—	—	一、〇〇七
馬來聯邦州	三、〇六七	二七七	一、五四一	四、八二五
ジョホール州	八三二	六五	三四	九三一
ケダ州	四一五	—	—	四一五
ペーリス州	四六	二四	一三	八三
ケランタン州	—	—	—	—
トレンガヌ州	—	—	—	—
計	五、三六七	三〇六	一、八〇二	八、二六八

（註）ケランタン州、トレンガヌ州の道路總延長は八千三百哩に及び、絶えずのみを示す。

右表に見る如く、馬來の道路總延長は八千三百哩に及び、絶え

ず手入され頗る優秀なものである。唯當り道路維持費は一九三八年、八六〇弗となつてゐる。恐らく道路の優秀な事は世界各國の殖民地中隨一であらうと謂はれてゐる。

表にも明かな如く、馬來の道路は東海岸ケラタン、トレンガヌ州は未發達であるが、西海岸よりは非常な發達を示してゐる。

現在馬來の幹線道路は二本あり、その一はペナン島の對岸プライより昭南島に至る半島縱斷道路で、全長五〇六哩、全路自動車の高速度行が可能である。即ち、プライを發してプロビンス、ウエルスリーを通り、ブノンスマンゴルに入る。この一帯は米の産地である。こゝからタイピン、クアラカンサーを経てペラ河を渡り、鑛業地イポーに入り、ゴーベンの石灰石の絶壁を眺めて、コム園や錫鑛山或は密林を過ぎ、聯邦首府コーランポーに至る。其の後セトルパスの難所を経て、スレンバンに出て、マラッカを通り、ジョホールバルに至り、コースウエイ橋を経て一路昭南島に達するのである。尙ほこの道路はプライよりアロルスターを経て泰國境のシンゴラに達する道路と相俟つて、馬來に於ける大縱斷道路を形づくつてゐる。

其の二は、西海岸のポートスウェッテナムから半島を横斷して東海岸のクアンタンに至る東西横斷道路で、約二八二哩である。

この二大幹線道路は四方八方に分岐して、各州に於ける産業地又は行政所在地を連絡する多くの道路を有し、又馬來全土のゴム

園や錫鑛山等で、その附近に政府の建設維持せる砂利道のないものは殆どなく、道路の發達は著しいものがある。

今、馬來の道路の状況を窺ふ資料の一として、多田中將の現地視察記の一節を引用しやう。

「……道路は相變らずよい。出せば七十マイル位のスピードも出せる。全半島を通じてこの經濟路は英國が金に飽かし、科學の粹で建設したものである。中央が鋪裝幅五・六メートル、その兩側が美しい芝生で二・三メートルもある。更にその外側が水抜き溝でこれに沿つて時にゴム、時に椰子の並木が整然としてゐる。綠の間に上空の碧空は又美しい。道路が廣いから森の中でも日が當る。ドライブも明るい氣持ちである。道路の凹凸も、カーブも、速度を十分出し得る様にしてある。カーブの處の羅列した白標の如き暗夜でも間違ひを起さぬやうにしてある。マイル數を示した道標も至れり盡せりで、特に路側の芝生の如きは各部落交通傭人の手によつて美しく刈り取られてあつて、この道を、この環境の中をドライブする心地はどうしても植物園か、公園の感じである。これが數百マイルに亘る全路であるから敬服する。……」

(多田中將「マライ縱斷科學旅行」より)

この視察記に依つても、如何に英國が道路の整備に力を入れて來たか解る。今次馬來攻略に方つて、この道路が遂に我機甲部

隊の絶好の進撃路となり、彼等の作つた道路が逆に彼等の没落を早める原因となつた事は、誠に皮肉な話である。

自動車事情

馬來に於ける自動車は、その道路の發達に伴つて、南方諸地域中最も普及を見てゐた。

戰前に於ける自動車の保有數量は約五萬臺を算し、蘭印に次ぐ地位を占めてゐた。

戰前南方各地の自動車臺數

蘭 印	七八、二八七
馬 來	四九、五六〇
比 島	四八、五八三
佛 印	三〇、九一六
ピルマ	二一、二〇九
泰	一三、五一八

(註) 昭和十五年末現在、米國商務省調査

斯様に、保有數量の點から見れば、蘭印の下位にあつたが、その普及率の點から云へば斷然他を壓し一位を占めてゐた。即ち、自動車一臺平均人口は一〇四人で、我國よりも遙かに高い普及率を示してゐた。

戰前の南方の自動車普及率

(地域) (自動車一臺平均人口)

馬 來	一〇四
比 島	二九六
ピルマ	七二六
佛 印	七二七
蘭 印	八一〇
泰	一、二二一

(註) 昭和十五年末現在、米國商務省調査

今次の戰爭に依り、保有臺數に減少を來した事は争はれない。即ち、今次作戦に依つて我軍に押收された自動車は、昭南島のみに約二萬臺、馬來半島全體が三萬臺に近いと謂はれるが、その六割はスクラップ車輛と謂はれてゐる。

自動車の分布状態は、道路の發達に比例して、海峽植民地、聯邦州に集中してゐる。

記録は稍古いが、昭和十三年度の統計を見ると、次の様な分布状態を示してゐる。

戰前自動車分布状態

州別	海峽植民地	聯邦州	非聯邦州	計
車種別				
家用貸切乗用車	一四、〇〇〇	三、五五五	五、二九五	三、〇、八〇〇
乗合自動車	六、八	九、六	七、八	三、五、二

自動二輪車	六六二	二、〇五五	五、七	三、五九六
自家用貨切貨物自動車	三、九七七	二、八〇二	一、八三三	八、五九八
其他	三三四	三三三	一、〇	五九
計	三、〇五一	一、八六〇	八、五七六	四、三三七

(註) 昭和十三年現在、英國海外貿易局調査

右表に見る如く、自動車總數の四二％は海峽植民地に、四〇％は聯邦州に集中し、非聯邦州には僅かに一八％の自動車が使用されてゐたに過ぎない。而も、昭南島及びジョーホル州内都市への集中度が高く、偏在的な分布状態を示してゐたのである。

猶ほ此の統計表に依つて目立つ事は、乗用車が非常に多く、トラックの少い事である。

即ち、乗用車は三萬臺を突破せるに對し、トラックは一萬臺にも達して居らぬ。この乗用車の多い事は、今次作戦に依る押収車輛にも現はれて居り、押収車輛の七〇％迄は乗用車に依つて占められてゐると云ふ。

之は、日滿支の自動車保有形態がトラック中心で、乗用車よりトラックの數量が多いのと全く逆な形態を示してゐる事は注目し値ひする。

かゝる乗用車中心の保有形態は、米英流のもので、從來米英に半耳られて來た南方の自動車界は泰を除き何れもかゝる形態を採つて來たのである。試みに戦前に於ける南方各地の自動車中、乘

用車の占める割合を示すと次の如く大きなものである

佛印	八五％
馬來	七二
蘭印	七〇
ビルマ	六七
比島	六四
泰	四六

かゝる、從來の乗用車中心の保有形態は、今後産業開發の見地より、又國防的の見地より當然是正され、トラックの増大化に向つて進路が變へられる事であらう。

猶ほ、又從來の馬來の自動車保有形態の特徴は、自家用乗用車が多く、又、小型の車の普及をみてゐた事である。

今、馬力別に乗用車をみると、

八馬力以下	三、三三五臺
八——一〇馬力	一一、八一九臺
一〇——一六馬力	一一、二〇九臺
一六——二〇馬力	一一、二〇六臺
二〇——三〇馬力	三、八九〇臺
三〇馬力以上	六三一臺
計	三二、〇九〇臺

(註) 昭和十三年現在、英國海外貿易局調査

即ち、一六馬力以下の所謂輕自動車が壓倒的に多い。

之は、輕自動車の本場である英國の屬領であつた關係から、英國製の自動車が使用し易い立場にあつた事と、課税方法が馬力税で馬力の小さい程、税金が安かつた關係である。

例へば、昭南島に就てみれば、八馬力以下の車は年額一八弗、一〇馬力未満の車は三六弗、三〇馬力未満は六〇弗と云ふ税額であつた。

一方、前述の様にトラクタの使用の少かつた事は、一つには税金の關係があつたのである。殊に營業用トラクタに對しては頗る高税を課してゐた。例へば二トン積トラクタに對し四八〇弗、二トン半のトラクタには六〇〇弗と云ふ高税を課してゐた。従つて、トラクタに於ても、營業用車は少く、自家用が多かつたのである。大きさは自家用では一トトン半から二トトン程度、營業用では二トトンから三トトン位のものが多く使用されてゐたのである。

バスも、全州で約二千三百臺位しかなく大した事はない。昭南島などで使用されてゐたバスはディーゼル機關を用ひた非常に大型のものが相當に使はれてゐたが、其の他の處で走つてゐるバスは内地のバス程度の大きさである。

この他に支那人のはじめたモスキット、カーと呼ぶ小型の原始的なバスがある。これは丁度内地のコンマーシャルな馬車の様な

ボディをつけ、それに支那人を滿載し、屋根には野菜や荷物を積んで走つてゐる原始的なバスである。

自動車關係の工場としては、山下、パーシバル會見で有名なフオードの組立工場が昭南島に設けられてゐた。

米國はこの他南方各地に自動車組立工場を設け、之を根城にして南方の自動車界を牛耳つてゐたのである。

參考迄に、南方の米國系の自動車組立工場所在地をあげると次の如くである。

フオード系

馬來(昭南島)

印度(ボンベイ、カルカッタ、マドラス、コロンボ)

比島(マニラ)

濠洲(プリマウス、シドニー、ブリスベーン、ジローン)

ニュージラランド(ウエリントン)

ゼネラル、モーター系

ジャワ(タンジョンブリオク)

印度(ボンベイ)

濠洲(メルボルン)

ニュージラランド(ウエリントン)

この中、既に馬來の昭南島工場を初め、マニラのフオード工場

タンジョンブリオクのゼネラル、モーター工場は我が手に歸し
新生の門出についてゐる。

従來、馬來の自動車は専ら、英國及び米國製に依つて占められ
て來たが、大東亞戰爭を境に、茲に完全にその供給元を斷ち切ら
れたから、今後は日本に依つて其の不足を賄つてやらねばならな
い。

馬來の現在は、戦火に依り自動車數も減少してゐるが、差し當
つて出来得る限り、現に使用してゐる自動車の壽命を伸ばす工
夫が肝要であらう。スクラップ車輛を解體し、使へる部品を生か
す事も肝要な事である。

が、自動車は刻々と消耗するものであり、長くて十年経てば廢

車の運命に會ふ。この時は何としても日本から新車を補充せねば
ならない。

この際には、先づ産業的にも國防的にも有用なトラックを先き
にし、乗用車は後廻しにすべきであらう。トラックに次いでバ
スの補充を考へねばならない。

乗用車は米國流の燃料消費の大きい大馬力大型主義のものよ
り、歐洲式の燃料の經濟な輕自動車に向くであらう。

何れにしても、今後馬來の自動車界を指導するのは日本の使命
であり、若し、性能の低劣な國産車を供給し、住民の輕侮を受け
るが如き争があれば、單に我自動車技術陣の恥である許りでなく
南方經營上由々しい問題が生ずる。この點、我々は太いに努力し
なければならぬ。

土木常備者表彰規程制定に就て

有 岡 富 次

北海道廳に於ては道路工夫優遇の一端として昭和十五年三月道
路工夫表彰規程を定め爾來此の規程に依つて黙々として陸運増強

の第一線に挺身する戰士の顯彰を行つて來たが今回更に之を擴張
して土木現業所、治水事務所、築港事務所の一般常備者にも及ぼ